

家族の一員 イヌの不思議



「イヌは人のしぐさを読み取るのが得意なんです」と話す藤田和生教授

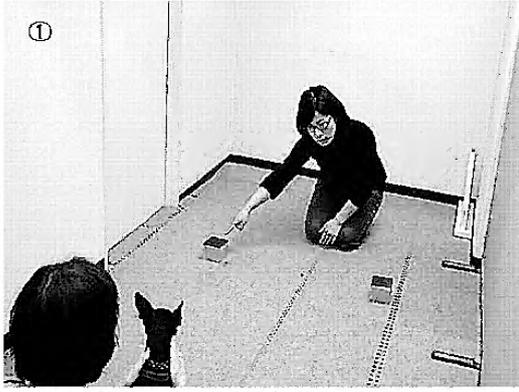
京都大学文学研究科心理学研究室の「CAMP-WAN (キャン・ワン、Companion Animal Mind Project - Wide Area Network)」というプロジェクトで、家庭犬を養う知性や心を探っている。

ヒトの最高の友、イヌ。家族の一員として、子どもと同じような存在になっっている家庭も多い。まったく別種の動物がパートナーとして一緒に暮らすのは、よく考えたら、とても不思議なことだ。どうして人々はイヌを愛し、また、愛されるのか。イヌの心に注目して、最近の研究の一端を紹介したい。

(編集委員 宇川聡)



指差し確認の実験 ①容器に指をさす②イヌは指差しという信号を理解し、人が示した容器の方に向かう (CAMP-WAN提供)



ヒトの動作わかるワン

いったゲーム感覚の実験を行った。イヌは飼い主の声を聞くと、飼い主の映像を思い浮かべている可能性が大きいことがわかった。声という音声刺激によって飼い主が現れるという期待感を持ち、モニターに違う人物の映像が現れると「そんなはずは……」という反応が出るのだという。

帰宅する際、自宅の近くに来ると飼い犬が鳴いて出迎えてくれる経験をした人も多い。行動、表情に敏感では、なぜヒトとイヌはパートナーになれたのか、イヌの認知能力から示唆されるものが多い。最近の研究によ

「指差し確認」という心理学の実験がある。例えば、容器を二つ用意する。遠くにいるイヌに、片方の容器に視線を向けながら指をさすと、ちゃんとその容器に向かう。

同様のことは、ヒトの赤ちゃんと生後10か月程度でできるようになるが、知性も行動もほとんど「人間」といっていいチンパンジーはうまくできない。イヌは指をささなくても人間の視線の動きをみて、容器を選べる能力もあるという。

人間の信号を理解し、共同作業ができる動物は他に例はない。生後しばらくした子イヌでもできることから遺伝的な能力の可能性もあるという。イヌの言語理解能力についても注目すべき報告が出てい

る。2004年、ドイツ・ライプツヒにあるマックス・プランク進化人類学研究所のグループが、人が話す名詞や動詞約200語を理解できるという研究を米科学誌「サイエンス」に発表した。数個の物体を並べ、その中に一つだけ名前を知らない物体があるとき、「それをとってきて」と指示すると、イヌは「他の物体の名前はすべて知っている」と残ったこれに違いない」と推理して未知のものを選ぶことが報告された。

CAMP-WANでは、調査に協力してくれるイヌやネコを募集している。詳しくはホームページ (https://sites.google.com/site/kyotocampwan/home) へ。

1000の言葉を理解

最近の別のグループの研究では、1000の言葉が理解できることが示されている。

多くの飼い主は悲しいときに慰め、癒やしを与えてくれると感じている。楽しいとき、悲しいときなど感情の変化は見分けられるようだが、慰め行動をするかどうかといった感情については正逆の研究が出ており、これからの課題だとい

藤田教授は「ヒトとイヌがよい関係を保っているのは、イヌの知性や能力からくる社会性によるのではないでしょう。見つめたり、じゃれたり甘えたりといった行動は、その方がよいことがある、人間の指示に従った方がいいという、イヌにとって適応的な生き方で、人間はそれを心が通い合っていると誤解している可能性もあります。でも、こんな『美しき誤解』は素晴らしいことですね」と話す。